

ホップ・ステップ



『新しい年がスタート!』

毎年、年の初めには、こうしたい、ああしたいと、色々なことを考えるが一年が終わってみると思うようにはなっていない。それは社会情勢も同じだ。3年前の政権交代は見事に国民の信頼に背いた。今年、新政権はどうなるだろう・・・。

受験生にとって年の始めは、入試に向けて受験勉強のラストスパート。誰もが入試で失敗できないというプレッシャーと不安にかられる。

自分の人生を大きく左右する進路決定で弱気になる必要はない。大事なのは結果ではなく、今やれる事、やらなければならない事をやるかどうかがかかっている。

15歳は10年後25歳だ。そのとき自分がどうなっているか。目標や夢を達成するには、今する努力にかかっていると言っても過言ではない。



2012年は12月22日から冬期講座がスタートしました!



学習中に居眠りをしている証拠写真です

ペンはまわさないで!



3年生の男子が掃除を手伝ってくれました。

かかっていると言っても過言ではない。社会の現実を知り、社会が求める大人にならないければならない。それには、学力や教養、コミュニケーション力など色々なことが要求される。

近い将来、社会が必要とする、社会の役に立って大人になることが自立へ繋がる。特に、中学生や高校生には年の初めにしっかりと目標を持つことが大切だ。就職難という厳しい現実はまだ続く。

『高卒就職250人決まらず』

釧路公共職業安定所がまとめた11月の有効求人倍率は0.88倍で、前年同月より0.1ポイント上昇し、3ヶ月連続で前年を上回った。求職者数が減少している一方で、求人数が増加する従来の傾向が続いていることが主な要因。数値的には上昇が続いているが、

依然として一度出した求人が埋まらず、再度同じ求人を出す「更新求人」が多く、「特に医療・福祉でうまくマッチングできないケースが目立っている(同職安)」としている。

同職安によると、11月の新規求職申込件数は1047人(前年同月比101%減)と2カ月連続で前年同月を下回った。一方、新規求人数は1206人(同109%増)で2カ月連続で前年を上回った。月間有効求人数は3053人(同109%増)だった。

新規求人数を主な業種別でみると、増加となったのは建設業、運輸業、郵便業、卸売業・小売業、宿泊、飲食サービス業、医療・福祉。減少したのは製造業、情報通信業、サービス業となった。

特に医療・福祉の新規求人数は、11月までの累計で前年同月比188%増の2437人で推移しているものの、看護師やヘルパーなどの資格が必要のため、求職数とうまくマッチングできていない現状がある。同職安は「数字的には上がっているが決して就職しやすい環境ということではない」と話している。

一方、来春の高卒予定者を対象とした求人数は538人と前年より18%減り、就職内定者数は393人と21%増加した。内定率は6割を超えたが、新規高卒者の就職環境は厳しい環境にあり、250人の生徒の就職先が決まっていけない。このため、同職安では来年2月6日午後1時30分から釧路キャッスルホテルで、2012年度新規高卒者就職促進会を開くことにしている。

12月27日 釧路新聞から

『年末の大掃除』

12月29日、2012年最後の授業が終わってから3年生の男子に掃除を手伝ってもらった。30日が日曜日だったのと22日から冬期講座を始めたので29日で授業を終わり、年末・年始の休みが1日多くなった。

3年前までは床がPタイルで上靴使用だったので、かなり汚れた。年末の大掃除では、みんな裸足になって床磨きをやってくれた。とても大変な作業だった。古い卒業生は今でもその時のことを覚えている。

床がカーペットになってからは上靴を持って来る必要もなくなり、汚れも少なくなった。それで

『冬休み・冬期講座も残りわずか!』

今日(5日)から冬期講座が始まりました。学校の宿題も塾の課題にもしっかりと取り組んで下さい。

10日は中1・2年生の学力コンクールで小学生、中3生は休みです。11日が中3生で、他の中学生、小学生は休みです。コンパス・定規・昼食が必要です。集合時間は午前10時15分、終了時間は1:20分、3年生は3時10分です。

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火

1月の予定

携帯電話の
電源は必ず
切ってください。
携帯電話の持込は禁
止。連絡は塾の電話
を使用して下さい。

就活：企業が求める『コミュ力』とは『話す』より『理解して聞く』

採用にあたって企業が重視するのは、「コミュニケーション能力」。日本経済団体連合会の調査で9年連続で1位となった。では、具体的にはどのような力が求められているのか。神戸女子短大の中川伸子教授らが企業などに実施したアンケートから、コミュニケーションの基礎となる「聞く・話す・読む・書く」のうち、企業側が指摘する新卒者に欠けているのは、「聞く力」だと分かった。【亀田早苗】

アンケートは、昨年6月、中川教授、目白大短大部の油谷純子教授らが共同研究としてまとめた。「ビジネス現場で大学、短大卒業生に求められるコミュニケーション能力は何か」を知り、それを学生が身に付けられる教育内容や方法を検討する目的だ。10年10～11月、企業にアンケートを郵送、一般企業116社、幼稚園・保育所や医療・介護の40施設が回答した。

入社1年以内の新卒社員・職員のコミュニケーション力について、「きく・話す」「読む・書く」の項目に分け、複数回答で質問した。

仕事上求められるコミュニケーション力を「きく」「話す」「読む」「書く」「チームワークでのコミュニケーション全般」から選択する形で質問。「きく」が51・6%で最多となり、「チームワークでのコミュニケーション全般」の31・4%を大きく上回った。「話す」が13・1%で続いた。

また、「きく・話す」の項目で問題点を聞いたところ、別表のように一般企業では「自分の言葉で必要なことを伝える」が19・4%でトップだったが、「相手が求めていることを理解する」(18・7%)「分からない点を質問する」(16・0%)など「きく」項目への回答が多かった。

一方、幼稚園などの施設では「話す」を重視していた。自由記述では「理解力が不足しているのでコミュニケーションがとれない」「単に聞くのではなく、想像力を働かせながら聞くことが必要」などの意見が寄せられた。

中川教授は「学生側は採用試験を考えて話す、書く力を重視するが、企業側は、就職後の新卒者が指示を正確に理解し、分からなければ質問して対話できる、『きく』力を求めている」と指摘。現在、こうした企業側のニーズに対応するためのカリキュラムを検討、一部は実践している。

毎日新聞 11月19日

コミュニケーション能力というのは取り扱いがかなり難しいし、教育して育てるのはとても難しい。実社会では特に大切なことは言うまでもない。

この記事のような分析はともかくとして、指導する側の実感として、最近の子供たちは人の話を聞かない。「聞いていない」「聞いているようで覚えていない」ということが昔に比べると圧倒的に多くなった。聞く力が弱い。その前に、聞く姿勢を持っている生徒が減ってきている。コミュニケーション能力としての聞く力の前に、話を聞くことそのものの力が失われている。

新しく習ったことを絶対覚えるぞと、意欲的に真剣に取り組む生徒は常にいる。教える側にも力が入った。大変だったが充実していた。学習への意欲を前面に出して取り組む生徒は少ない。行動すべてに元気がなく積極性に欠ける。大きな声で挨拶ができない生徒が多すぎる。「何でも自動」の実感しない過保護状態の日常に慣れてしまった結果だろう。

そういった生徒たちをしっかりと社会人になれるように育てるのが大人の使命であり責任だ思う。

天才は遺伝か環境かーアインシュタイン脳の最新研究

天才は「生まれか、育ちか」——。才能や成功は遺伝で決まるのか、環境で培えるものなのかという二極論は、答えの出ない永遠のテーマだが、天才と凡才の間には、少なくとも、目に見える大きな違いがあることが分かった。脳の構造である。

11月16日に発表された、米フロリダ州立大学の進化分類学者、ディーン・フォーク氏らが行った共同研究によると、相対性理論で知られる天才物理学者アルベルト・アインシュタインの脳の写真を調べた結果、前頭葉などが並外れて発達していた。

脳の重さは1200グラム強と、平均的な大きさだが、全米保健医学博物館に保管されている14枚の写真を分析したところ、集中力や粘り強さをつかさどる前頭葉や、体性感覚皮質などが大きく、脳のシワである脳回が複雑さを極めていた。これが、たぐいまれなる空間視覚能力や数学能力を生み出したのだろう。

神秘に包まれた天才のベールがはがされたことで、「やっぱり、人は遺伝で決まる。努力などムダだ」と開き直るのは、まだ早い。共同研究者の神経科学者、アルバート・ガラバーダ・ハーバード大学医学大学院教授が米科学誌『サイエンス』(11月

15日付電子版)に語ったところによると、「まだ答えが見つからない非常に重要な問い」が浮き彫りになったという。

アインシュタインは、偉大な物理学者になるべく、特別な脳を持って生まれたのか。研究に研究を重ねるうちに特定の部位が発達したのか——。つまり、天才は99%の才能と1%の努力なのか、はたまた1%の才能と99%の努力なのかというナゾには決着がつかないままなのである。

才能にしろ、努力にしろ、片方だけでは無理がある。人の3倍の時間をかけて努力しようとしても、時間には限りがある。ある程度の才能は必要だ。一方、才能やカミソリの刃のように切れる頭脳、要領の良さは、ともすれば油断と怠惰を生む。30代までは、天賦の才で次々と大企業にヘッドハンティングされ、管理職を歴任していたが、50歳の声を聞いたとたんレイオフされ、人脈作りも勉強も怠っていたために、長期失業を余儀なくされた人もいる。

翻って大輪の花を咲かせた人には、優秀ながらもナタのような切れ味の人が多く、まじめで、地道な努力家が圧倒的だ。40～50%のIQや才能と50～60%の努力、といった印象を受ける。アインシュタイン自身も、天才という意識は薄く、「人より時間をかけて、研究に取り組んでいるだけだ」と、語っていた。

学者のなかには、熱心な練習は不可欠だが、まずは訓練を積むに足る知能が必要だと指摘する人もいる。ある学者が、一流の科学者64人のIQを調べたところ、平均が150前後と、一般人を50ポイントも上回っていたという。IQは、大半が遺伝で決まる。

天才論は、優生思想や格差を助長しかねない問題でもあるだけに、専門家も慎重だ。特に教育関係者は、「機会均等」に重点を置く米国でも、「結果の平等」に配慮するあまり、子供たちのIQや天賦の才を軽視する傾向があるという声も聞く。

『タイム』によると、02年にブッシュ政権下で、「no-child-left-behindAct(落ちこぼれ防止法)」が生まれると、公教育を中心に、才能育成よりも、成績の良くない子供たちの教育にお金がかけられるようになり、英才教育が弱体化した。同法誕生後、イリノイ州では、英才教育費が1600万ドル(約13億円)カットされるなど、今や知的才能が“絶滅の危機”に瀕しているという。こうした状況に警鐘を鳴らす声も多い。

米科学誌『サイエンティフィック・アメリカン』(11・12月号)の「天才」特集号は、「若き天才を育てる」と題した記事のなかで、教師が、天賦の才に恵まれた子供たちを発掘し、特別な授業や研修を施し、才能を開花させることが、イノベーションにあふれ、生産的で、文化的にも豊かな米国社会をつくると論じている。

それには、まず能力をはぐくみ、高めることだ。エリート学生だけでなく、低所得層やへき地の子供たちにも、知的豊かさを追求する機会を与える必要がある。筆者も、大学生時代、低所得層の中学生の男の子にボランティアで英語を教えたとき、英語が大の苦手だった男の子が、初めての家庭教師でやる気が出たのか、テストで80点を取って職員室が大騒ぎになったと聞いたとき、「機会」の大切さを痛感した。

メンターリング(先輩による指導)も効果がある。科学分野でノーベル賞を取った米国人の半分以上が、ノーベル賞受賞者の先輩から指導を受けていたという研究結果も出ている。もちろん、粘り強さや社会を渡っていくためのソフトスキル、リスクに挑む姿勢などの性格的特徴も、才能の開花には欠かせない。

「天才や発明家にあまねく共通するものは、認知能力でもなければ、感情でもない。ハイレベルのモチベーションであり、人が良しとするゴールを受け入れない姿勢だ」(サイエンティフィック・アメリカン)。

そして、最大のカギともいえるのが、アインシュタインが成功の秘訣と呼ぶ「子どもの心を持ち続けること」だ。いくつになってもパッション(情熱)の火を燃やし続ける——。これが、天才の極意だろう。

ウォール・ストリート・ジャーナル 11月24日

学習指導を仕事とする立場の人間からすると、天才はともかくとして秀才は環境で作られるものだと思う。ただし、幼児期の環境もあるだろうから、幼い時に習得できているものもあるかもしれない。これは遺伝や資質と間違いやすい。でも、学力は日常の訓練、努力の積み重ねの賜物と呼んで間違いはない。というか、学力は訓練で高度に定着できる。訓練、努力の継続ができるかどうか非常に重要なことであり、学力の要素の一つであるスピードも訓練で早められる。学力は努力に対して公平で自分を裏切らない結果を得られる。

能力は磨かなければ発揮されないものであり、どんな分野でも努力しなければ、続けなければ結果には繋がらない。